

発行

# 博物館だより

富士吉田市歴史民俗博物館

〒403

山梨県富士吉田市上吉田2288-1

☎ 0555-24-2411

平成7年9月30日

～ 歴史散歩～



## 桂川水系を歩く



【鐘山の滝】



【小明見橋付近】



【穴明見浅間神社】



【旧宮川電灯発電所跡地】

6月11日の日曜日、晴天のもとで歴史散歩「桂川水系を歩く」を実施しました。富士吉田市を流れるこの桂川は、山中湖を水源とする相模川水系最大の源流です。昔から農業用水や水力に利用されており生活に欠かせない川でした。桂川は、富士吉田市の歴史を知る上でとても重要であるといえます。

当日は、博物館近くの鐘山の滝を出発して桂川の水系を本流だけでなく、水が人々に利用されていた場所や施設を星野芳三講師の説明を聞きながら歩きました。

参加者は日頃見慣れた桂川にも多くの歴史があることを感じ取っていた様子で、とても好評でした。

☆博物館では、歴史散歩・体験学習などの講座を積極的に開いていきたいと考えております。「あれをしてほしい」「こんなことがしてみたい」等のご要望がありましたら博物館までご連絡ください。市民の皆様のご意見をお聞かせください。

～博物館の展示から～

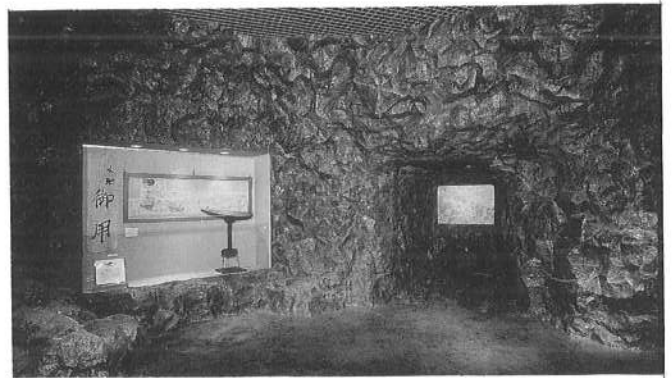
## 『新倉掘抜』

新倉掘抜あらくらほりぬきとは、河口湖の豊かな水を山一つ隔てた新倉村や、水不足に悩む他の村々へ引くため江戸時代に掘られたトンネル水路です。

この掘抜は、総延長約4km・工費約7千両・人足延約11万人を要した大工事で、完成までには何度も工事を繰り返しました。

最初の工事は元禄年間に郡内領主・秋元喬朝によって計画施工されましたが、通水することは出来ませんでした。一説には両側から掘り進んだ穴が上下に食い違ったためだと言われていますが、この時の工事の様子を伝える資料がなく、はっきりしたことがわかっておりません。その後、享保年間～寛政・文化年間のおよそ100年の間、掘抜工事再開の声が幾度か上がりましたが、着工には至りませんでした。

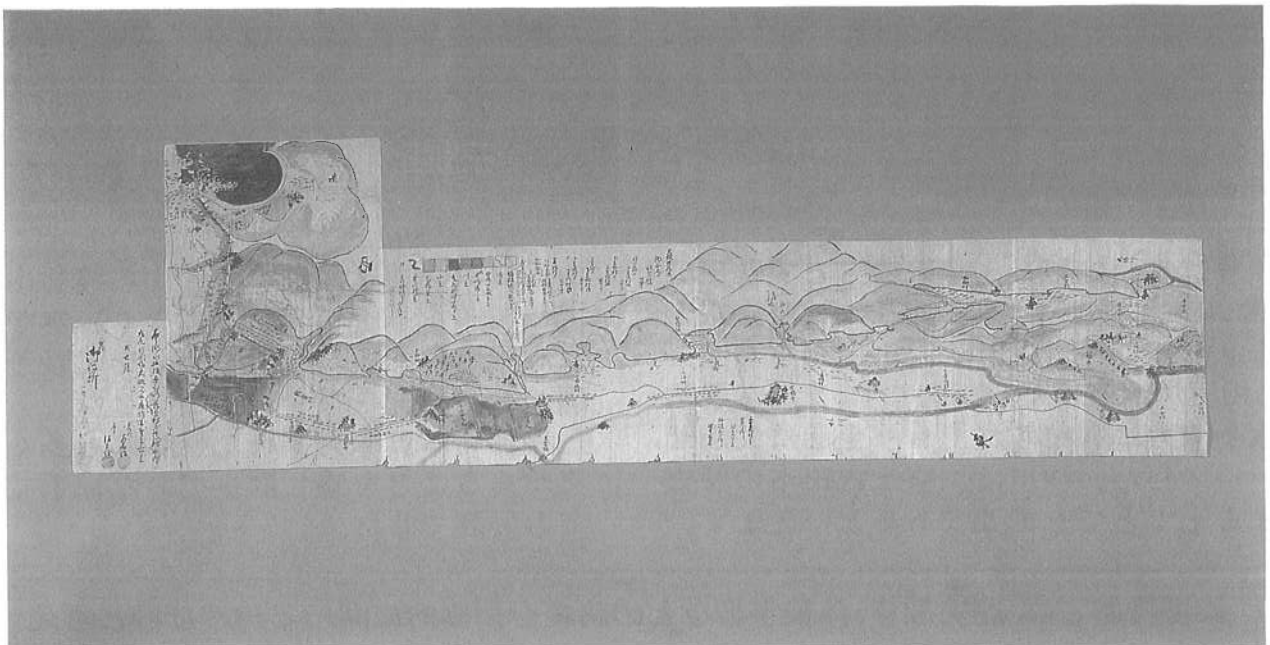
長い月日が経つうち、掘抜工事がただの



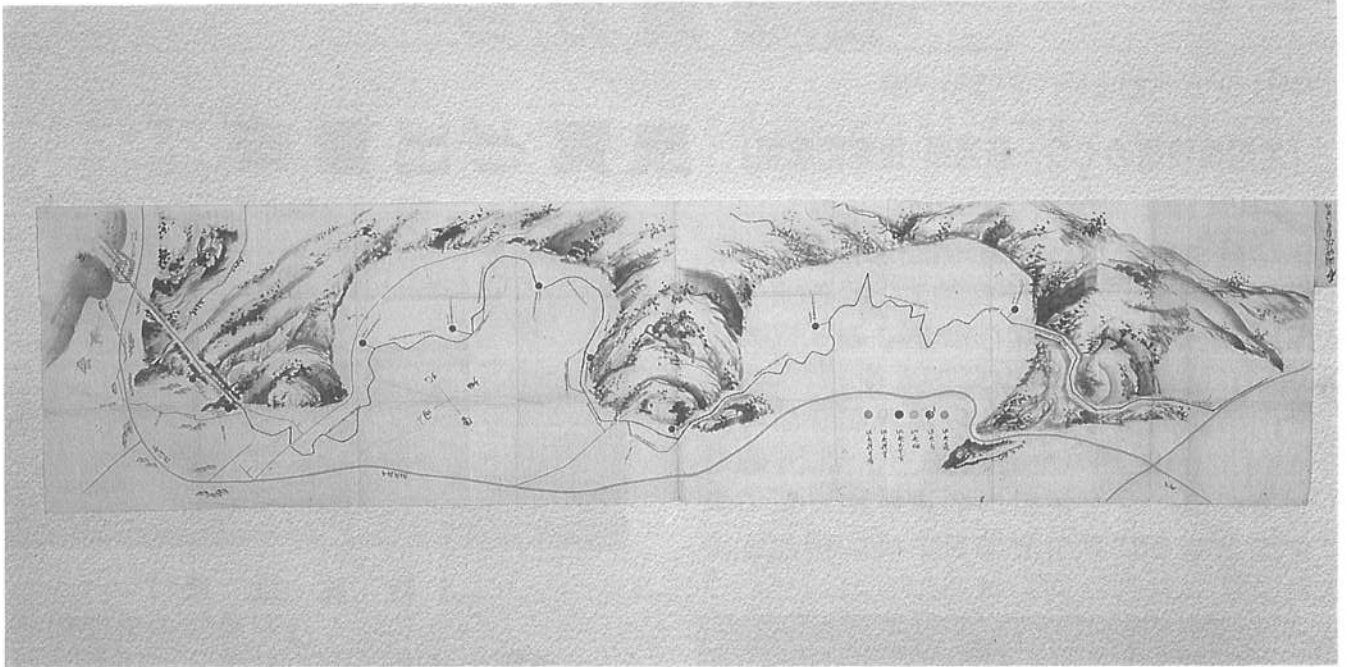
【新倉掘抜ジオラマ展示風景】

虚説とされるようになっていたなかで、弘化4年(1847)に大雨により山の一部分が崩れ、昔の掘抜跡と見られる古穴が発見されました。新倉村の自普請による試掘が行われ、村役人の奥脇左藤次を頭目に工事に着手しました。

〔写真1〕はその当時の計画図面です。工事は



〔写真1〕 【掘抜通水路計画絵図 / 嘉永3年(1850)】



〔写真2〕 【新倉掘抜絵図 / 慶応元年(1865)】

資金面や崩落の危険、加えて農閑期のみの作業であったので思いのほか難航しました。5年後の嘉永5年(1852)に一応の貫通をみましたが、水不足による河口湖の減水と崩落に備えての補強拡張工事などにより十分なものではありませんでした。翌年、完全通水となりましたが、長期の工事による村民の疲労・借金が残りと、通水後も村内で度々対立が起こるなど様々な問題が残されました。

また、当初の計画では掘抜通水後は、新倉村から薄原村(現都留市)まで水路を延長する予定でしたが、難工事であったため規模縮小により結果的には新倉村のみとなりました。

その後、安政2年(1855)に穴崩れが起き、掘抜は通水不能となりました。資金面や組織的な問題が多く残され、解決されなかったため補修の工事は文久2年(1862)まで実施できませんでした。

何とかして資金を調達しようと村の人々が心の拠り所としている新倉浅間神社の社木を売り払ったり、代官所に拝借金願いを出したりしました。そんな中で村の医師長島元長が私財300両を投じたりと掘抜に

かける思いは凄まじいものがありました。そして工事再開、3年後の慶応元年(1865)に再び通水に成功しました。〔写真2〕はその時の絵図で、河口湖と新倉の間の嘯山の裾を掘抜がめぐっているのがわかります。この掘抜の完成によって、人々は念願の水田を開くことができましたが、水田の拡大という成果に反して掘抜の維持管理に多くの出費を強いられるようにもなりました。

以後、この掘抜は明治末期の県庁隊道の完成によりその役割を終えるまで永続的に使用されました。

近世(江戸時代)は、開発の時代といわれています。この時代行われた用水・治水工事は、幕府や藩が主体的に実施したものがほとんどで、この新倉掘抜のような大規模な工事を一村が単独で行ったということはあまり例のないことといえます。ここまでしてこの難事業に新倉村の人々を駆り立てたのは何だったのでしょうか。

# 企画展から

## 「全国博物館めぐり～新潟県・良寛記念館」 良寛と出雲崎

開期：平成7年5月2日(火)～6月4日(日)

博物館では毎年この地域に関する企画展を行っていますが、本年度は全国各地の博物館施設と歴史ある町を紹介する「博物館めぐり」を企画しました。

今回の企画展では、(財)良寛記念館の協力を得て、良寛の生地であり、北国街道の要衝の地、また佐渡への渡航地として栄えた出雲崎を良寛の遺墨を中心に紹介しました。



【 展 示 風 景 】

出品は、出雲崎に関係する良寛の遺墨8点をはじめ、安田鞞彦・川合玉堂らが描いた良寛関係絵画、良寛の遺品を展示しました。また、出雲崎町の様子を写真などで紹介しました。切妻の家が建ち並ぶこの町並みは、市内上吉田の御師町と似ており経緯は異なりますが近世集落の形成を知る上で参考になるものです。

### 「良寛と出雲崎」企画展記念講演会を開催

平成7年5月14日(日)博物館講堂において、記念講演会を開催しました。講師に良寛記念館の吉田隆学芸員をむかえて、良寛と古里との関わりを様々なエピソードを交えて説明していただきました。



【 観 覧 風 景 】

### ～良寛の略歴～

江戸時代後期の禅僧良寛は、宝暦8年(1758)越後出雲崎の名主橘屋に生まれ、16歳で元服して文孝、剃髪して良寛と称し大愚と号しました。安永8年(1779)備中玉島円通寺の国仙和尚に得度をうけ、和尚に従い円通寺に赴き禅僧として修行に入ります。寛政2年(1804)33歳のときに禅の修業を極め、諸国行脚の旅に出ました。39歳ころ旅から帰国した良寛は名利にとらわれぬ乞食生活や托鉢の折に子供と戯れるなど気ままな生活の一方、本格的に書の練習を行い、良寛独自の書の基盤を形成しました。

各地を転々とした良寛ですが、深い信仰心や慈愛の念は終生変わらず、子供や農民とのふれあいの中で自身の信念を貫きながら書や詩歌に親しみ、後世にその名を残しました。



【吉田隆学芸員による講演】

## 富士山と山小屋

開期：平成7年7月1日(土)～8月31日(木)

7月から2ヶ月間にわたり「富士山と山小屋」展を開催いたしました。



【 展 示 風 景 】

### ～山小屋の歴史～

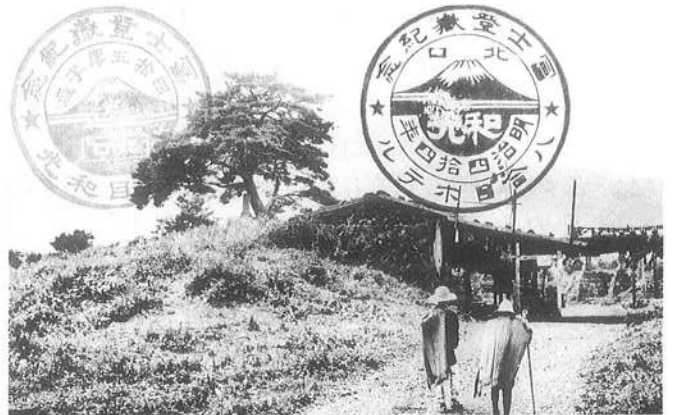
富士登山は、今日ではほとんどが白昼のことですが、江戸時代までは夜中の登山も盛んに行われていました。それは頂上へ夜明け前までに至る必要があったからです。富士山信仰における登山の最も大きな目的は、頂上で日の出を拝し日の出とともに現れる阿弥陀三尊を拝することでした。とりわけ江戸時代の初期までは富士山を神聖な山とする意識が強く、五合目以上には小屋を作ることが許されなかったため、必然的に夜中に登山せざるをえなかったのです。

吉田口登山道の小屋として初めて記録に現れたのは、文禄4年(1595)の五合目の中宮付近の小屋のことで、この時代すでに数軒の小屋の存在を知ることができます。他の記録によると、江戸時代の初期には五合目の中宮に18軒の小屋がありましたが、後に多くの小屋が五合目より上に移転したため、中宮の小屋は4軒に減ったとされています。これは五合目以上を神聖な地とする意識が薄れた結果だと思われます。

かつて、小屋の多くは御師の所有となっていました。御師は特定の檀家(信徒)と師檀関係にあり、登山の際に檀家は師檀関係のある御師の経営する小屋を利用するのが決まりになっていました。富士信仰の檀家は後に富士講檀家として再編され、また多くの小屋も御師の手を離れていきますが富士講と小屋はかつての関係を保ち、特定

の小屋を定宿として利用する関係が続いていきました。

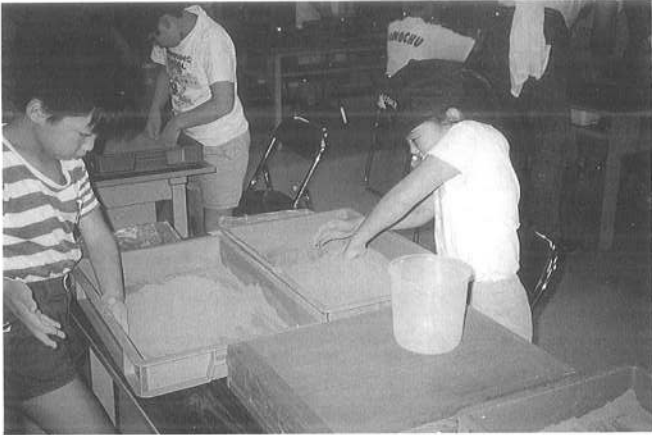
明治初年、登山の女人禁制が解かれると、女性の登山者が新たに現れ、さらに従前の信仰を目的として登山する道者とは別に、信仰と無関係の一般の登山者が増えてきました。この時代、多くの登山者の誘客を目的に、鉄道会社や山小屋組合などを中心に吉田口登山道全体の宣伝活動が展開されました。これは富士山を信仰の山としてだけではなく、観光の山としても売り出すのが目的であり、こういった宣伝活動は江戸時代にもありましたが公然と観光をかかげた宣伝は明治以降に始まったといえます。



【中の茶屋／明治44年】

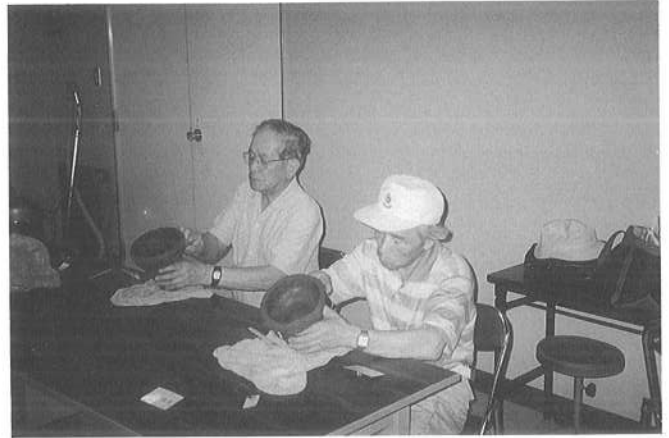
山内にある山小屋は、総称して「小屋」と呼ばれ、さらに一般に五合目以下は「茶屋」、六合目以上は「石室」と呼び分けられています。五合目以下の小屋はおもにひと休みするための施設がほとんどであったので「茶屋」と呼ばれていました。そして、小屋の建築材も周辺から容易に手に入る木材が中心となっています。一方、六合目以上の小屋は宿泊のための施設です。樹木が生えていないため、建築材として周辺に無数にある溶岩が用いられました。六合目以上の天候は変わりやすく風雨も強いので溶岩は絶好の建築材といえます。室には、三方を壁で囲まれた部屋、山腹に掘られた穴ぐらという意味があり、石で囲われているところから「石室」と呼ばれるようになったのでしょうか。

## ● 体験学習 「縄文土器作り教室」



【① 粘土練り】

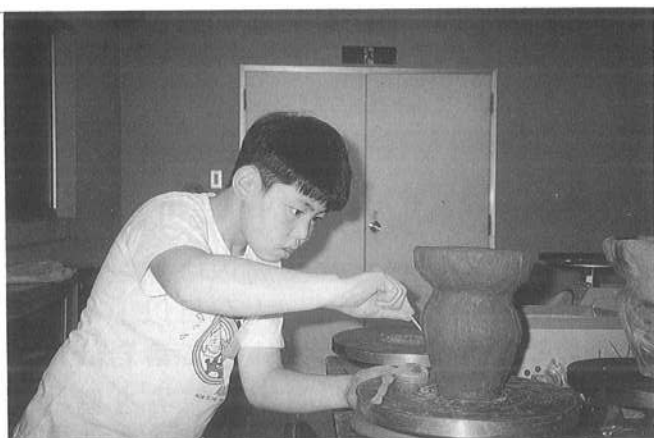
7月30日から8月20日までの毎週日曜日を利用して縄文土器作り教室を実施しました。この講座の目的は、土器作りを通して縄文人の生活や技術を学んでもらおうとするものです。今回は、計4回の日程で縄文土器を作りあげました。第1回目は、半日かけて粘土を練り上げる作業をしました。土器作りにとって、粘土練りは最も大変な作業の一つです。参加者は思いのほか疲れた様子でした。第2回目でモデルを参考に形を作り文様をつけました。思うように形が作れずに苦労していた人、丁寧に作り上げた人



【③ 土器を磨く】

それぞれでした。第3回目で水が漏れないようにするため土器の内面を丁寧に磨き上げ、最終日の第4回目、焚き火による野焼きで作品の土器を焼き上げました。炎天下での野焼きはとても暑く、たいへんな作業でしたが、誰一人壊れることなく、全員無事に作品を完成させることができました。

現在の私たちの生活では日常使うナベや茶碗は簡単に買うことができますが、縄文人たちは生活の道具を自分たちの手で作り上げていたのです。参加者の皆さんは、縄文土器を作る難しさを身を持って感じた様子でした。



【② 形作り】



【④ 焚き火で焼き上げ】

# 博物館実習

8月18日(金)から31日(木)までの2週間、当館において2大学4名の博物館実習生が学芸員資格習得のため学んでいきました。

都留文化大学 土肥光雄 武井由希子  
西村雅朗  
白梅学園短期大学 堀内香里

## 博物館実習カリキュラム

事前研修	実習にあたっての諸注意・レポート作成
8/18(金)	オリエンテーション 博物館概要～概要及び運営・館内外見学
8/19(土)	博物館講座Ⅰ～博物館における教育普及活動について
8/20(日)	博物館講座Ⅱ～体験学習事業への参加
8/22(火)	博物館講座Ⅲ～講座の企画実施方法
8/23(水)	資料の受入～受入システムとカード作成、整理 資料の扱い方Ⅰ～古文書の扱い方
8/24(木)	資料の扱い方Ⅱ～民俗資料の計測と調査
8/25(金)	博物館施設見学～近隣博物館施設3館見学
8/26(土)	資料の扱い方Ⅲ～古書の整理
8/27(日)	展示計画Ⅰ～展示シナリオ作成(テーマ設定)
8/29(火)	展示計画Ⅱ～展示シナリオ作成(計画)
8/30(水)	博物館講座Ⅳ～作品展準備
8/31(木)	展示計画Ⅲ～展示シナリオ作成(発表)



【実習風景】

## ～実習日誌から～

モノの集まる博物館、収集されたモノがどのようにして資料になるのか。そして豊富な資料をどのように体系づけて利用者に公開するのか。博物館の仕事は表からはうかがうことのできない奥の深さをもっています。わずか2週間という短い期間ではありましたが、舞台裏に身を置き実習できたことで博物館活動の一端をうかがうことができました。この実習を糧として生かせるよう努力していきたいと思います。  
〔土肥光雄〕

博物館というと“暗い”イメージが私にはありました。館内が少し暗いので、実習に来てからもなかなかそういったイメージが抜けませんでした。しかし、職員の方々は以外と明るくて私の博物館の印象もだいぶ変わってきたような気がします。そんな意味も込めての言葉ですが、機会があったら職員の人と話してみるのも良いと思います。実習を通して、普段とは違った博物館像を見ることが出来ました。  
〔堀内香里〕

初対面の人を苦手とする私は実習前不安で大学の教務課でどんな人と一緒に実習をするのか調べに行ったりしました。実習内容は、「ウゲッ勉強！」と思いましたが、実務作業中心でした。学芸員は身体が資本だと思いました。そういえばこれまで太った学芸員を見たことはありません。外で土方をし、中では様々な問題を抱えつつ企画・運営をする、何とやりがいのある仕事なのでしょうか。  
〔武井由希子〕

この学芸員は変わっていると思います。(良い意味で)堅そうな学芸係長は、音楽好きなベーススト。一見不真面目そうで実は不真面目な、いいえ真面目なTさん。唯一正常と言えるFさん。しかし皆さんの知識は広く博物館を愛し、学芸員としての誇りを持っています。そんな人達に囲まれて実習を行ったことは非常に幸せでした。2週間という短い期間であったが、多くのことを学びました。  
〔西村雅朗〕

# お知らせ

## ●次回企画展のお知らせ

### 「富士吉田市収蔵美術品展」

開期：平成7年10月7日(土)~12月3日(日)

富士吉田市では、市民の文化振興の一環として、絵画等の美術品を収集・公開しています。今回は、これまで収集してきた絵画の中から富士吉田市はもとより日本のシンボルでもある富士山を題材として描かれた作品を紹介します。

### 「雛人形と雛祭り」

開期：平成8年2月17日(土)~4月7日(日)

3月3日の雛祭りは女の子のお祝いとして行われる行事で桃の節供とも呼ばれています。本展では、市内の旧家で飾られていた雛人形を中心に、市域の雛祭り習俗を紹介します。

## ●博物館刊行物について

博物館では下記の図書を受付窓口で販売しております。



- ・博物館展示解説書 頒価 500円
- ・ふるさとの形-富士吉田の民具 頒価 600円
- ・富士吉田の昔話、伝説、世間話 頒価1,000円
- ・企画展図録-描かれた富士の信仰世界 頒価1,000円

## 編集後記

情報化の時代と呼ばれて久しいが、大変遅ればせながら我が博物館にもようやくコンピュータなるものが導入できました。近い将来、このようなシステムを使って展示以外にも資料の情報提供など様々な形でのサービスを行っていく予定です。(FU)

## 博物館利用のご案内

- 開館時間 午前9：30～午後5：00〔入館は午後4：30まで〕
- 休館日 月曜日〔祝日を除く〕・祝日の翌日(日曜・祝日を除く)・年末年始
- 観覧料 大人 300円(240円)・小人 150円(120円)  
( )内は20名以上の団体料金

※見学時間は1時間30分位が適当です。

※団体で来館される場合は予めご連絡ください。

※毎月第2、及び第4土曜日は小中高校生は無料です。

※市内に住む身障者(4級以上)は観覧料が半額になります。

※駐車場のご利用は午前9時～午後5時です。時間外の利用はご遠慮下さい。